
トレードオブ-*r e v e r s e*-

けしたり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トレードオフ・reverse

【Nコード】

N8229S

【作者名】

けしたり

【あらすじ】

興味本位でソレに近づいたことにより記憶を失ってしまっただけ。

謎の異能力が存在するこの世界で、だいきは無事に記憶を取り戻すことができるのか。

そして記憶が戻った時、彼の身に起こったこととは……？

注意

「トレードオフ・reverse」

筆者：けしたり

「トレードオフ・observe」

筆者：あてね

筆者は異なりますが、物語の内容は共同で考えたものです。
そういう意味での共同小説となります。

二作を同時に読んでも良いし、どちらかを先に読んでも良いです。

尚、この二作品は「魔法のいらんど」でも連載しているものです。

序章とある一つの闇の住人は

お前らは本当の闇を知らない。

己の脳に巢食う単なる憎しみの記憶のみでそんな脆弱な能力を振るったところで、所詮足元にも及ばない。もしも同じ舞台に立っていると思っっているなら、熱く抱擁したいほど哀れな奴だ。……ははっ！ 良いこと思いついたぞ。

いつそのことここで真の闇を味わわせてやろうか。

夕闇に混じって一人の学生が一人の巨漢を見下ろす。

地べたに腰を抜かすその男は左腕を丸ごと失っているが、傷口から溢れ出る鮮血や痛感よりも、今日の前に迫りくる学生に恐怖し後退りしている。

対して学生は無傷。そしてこの状況を楽しむように歯を見せ笑う。

「や、やめろっ……！ お前は、はあ、また人を、殺す気なのか……」

殺す？ はっ。笑わせてくれるねえ。殺しなんて虚しいことするわけないだろ。

「はあ、はあ……こっちでは有名人だぞ、お前。俺を殺したところでまた次が来るだけだ……」

順番待ちの切符は配布済みってか。メンドクせえ。こっちは大門

全開で歓迎してんだからとつと来やがれってんだ。今なら参加者全員サービスで死をも超越する世界を提供してやるよ。

学生は変形した右手を振りかぶる。

「だから殺すな。俺を殺したって意味なっ……！」

一瞬。

視認できない、もはや残像さえないほどの速さで振り抜くと、男の右腕と両脚が身体から引き離される。血飛沫は舞わない。しかしやがて切断面から新たな鮮血が溢れ出す。

「はっ、はっ、はっ……おっ、おっ、おまつ……はっ」

学生は踵を返し巨漢の男に背を向ける。そして携帯電話を取り出すとボタンを押してコール。

『こちら駿河総合病院です。きゅ……』

「そこから五〇〇メートル圏内の廃工場。ダルマがぶっ倒れてるから早く来た方がいいぞ」

『症状は……』

「んなもん知るか。とつとと寄越さないと出血多量で死ぬぞ」

『あっ……』

学生は要件だけ伝えると早々に通話を切り、そのまま携帯電話の

電源を落とした。顔だけ振り返り、顔面蒼白で呼吸の荒い巨漢に向かつて笑みを零す。

「がーんばって生きるよ？ ふっ」

四肢を失ったって現代の医学なら生きてられるぞお？ ふはっ！
その無様な姿で一生嘆けばいいさ。恨むなら医学と愚かな脳みそ
を持つちまった己に頼むぜえ？

夕日の差す廃工場を出ると、人の行き交う日常的な光景。親子連れ
やカップル、学生服姿の若者達。威勢の良い掛け声や車の走行音。

孤独な学生は思う。

平和ボケしやがって。この世界の闇を知らないってのは呑気でい
いねえ。涙が出そうなほど愉快的な光景じゃねえか。こんな非日常な
世界、二度と戻れねえ。戻っちゃいけない。

しばらく街中を歩くと、やがて人気のない教会に辿り着く。

ボロ雑巾を押し入れて数年もほったらかしにしたような、辺鄙とい
うより廃墟と化した佇まいの教会。そしてその教会の入り口には非
日常の住人が立っている。

「ちょっとあんた、今何時だと思ってるの？ いい加減時間を守る
ってこと覚えてくれない？」

茶色のストレートロングの髪に猫のように鋭い目つき。白のスク
ールシャツの上に紺のベストを着て、短い柄スカートを穿いた女子
学生。

「うつせーな。ちゃんと来てんだろ。約束は守ってる」

この女子学生は朱礼心^{しゅれいしん}。非日常に置いて唯一のオトモダチと呼べる存在。

彼女はため息交じりに「あのねー……」と言つと意気消沈気味に続ける。

「約束つてのは会うことだけじゃなくて会うまでも入れるのよ。電話入れても全然繋がらないし。あんたほんとにつ……」

「はいはい熱弁ご苦労さん。いずれ気を付けるから黙ってる。……つたく、どいつもこいつも説教垂れ流しやがって」

と言つてもあつちの説教は何も生産しないものだったけどな、と学生は頭の片隅で巨漢の言葉を思い出す。

『こつちでは有名人だぞ、お前。俺を殺したところでまた次が来るだけだ……』

つたく、最近になって無能な輩の噛みつきが激しくなってきた。一体誰がこんな非建設的な作業の首謀者だ？

「なーに？　もしかしてあんたまた喧嘩してたとか？」

朱礼が腕を組みながらブスつとした顔で覗き込んできた。

「ああ？　ああ、馬鹿が絡んできただけだ。気にすんな」

こいつは関係ねえ。巻き込んだところでただの足手まといになるだけだ。平和人は平和な世界でのんのんと暮らせばいい。

「ふーん。あんまり喧嘩するといろんな人から恨みかっちやうよ？ まああんたは強いからそんなのどうしたってことないのかも知れないけどさ、でも人の憎しみほど粘着して嫌悪なものってないし。気をつけなさいよ？」

「わーたわーた。んな熱弁がましたって俺は投票しねえぞ」

朱礼の話を半分聞き流し、先に教会の中へと入る。

「ちよっ……！ あんたそんな性格だから学校辞めさせられたんじゃないの」

「られたんじゃねえよ。愛と涙の感動青春ストーリー同梱で俺が送り付けただけだ」

「はっ？ ……はあ。あんたにはつくづく驚かされるわよ」

教会の中も外観と同様荒れ果てた大地のようになっている。

後から入った朱礼ももうお手の物だ。教会のオンボロ具合には微塵も驚かず、ある一点に向かって歩を進める。

並べられた沢山の埃を被った長椅子。粉々になったステンドグラス。崩れ落ちた天上の石塊。結婚式の光景なんてまるで浮かばない、幸せも夢もない荒れ地を進んでいくと、割と原形を留めている主祭壇がある。同じくその両サイドの突き出たスペースである翼廊や、名前も由来も意味もわからない銅像も、さっきまでの場所と比べれ

ば綺麗と表現するのも難しくない。

二人は主祭壇と翼廊を越え、こじんまりとしたスペースで足を止める。目的のソレ以外何も無い怪しくて寂しい空間。

「……」

ソレを見つめ黙り込む。

この中はどうなってるんだ？ トップの奴らはあやふやにしてダンマリ決め込むし、その上特殊な装置やらを使って完全に介入不可能にするし。調べるにも調べようがないじゃねえかよ。

とそこで朱礼が沈黙を破る様に幽かなため息を漏らすと、静かに口を開く。

「これでここに来たの何回目だっけ？」

「さあな。五、六回くらいじゃねえの」

「やっぱり何度来ても変わらないね。何もわからない」

「何寝ぼけたこと言ってんだ？ んなこた当たり前だ。こつやつて見るだけで全てが解決できんならお前のテストだって満点だろうよ」

「ただどここれまでここに何度も来たのが無駄だったというわけじゃねえ。わかったことが一つだけある。何度ここに来ようがこの場で調べようが、意味はねえ。全てはあの組織が担ってたからよ。とゆーことはそれだけ重要な何かってことだ。一般人も闇の人間も、

誰もが触れちゃいけない何か。そしてそれをあの組織だけが握っている可能性があるってこった。

「今うつすらとに馬鹿にしたよね？」

「勘違いすんな。完全に馬鹿にしてる」

目を細くして睨んでいた朱礼は次第に顔を紅潮させると、「ふんっ！」とそっぽを向く。

「別に勉強ができないわけじゃないもん。勉強をしないだけだもん」

「そうか。じゃあしない理由とそれに伴うテスト結果の意図を説明してみる」

「うつ……」

急に口ごもる朱礼。

「次会うまでの宿題。これはヤクソク、とゆーことで」

「わっ、わわっ、わかったわよ！ 今に見てなさい、あんたを土下座さしてやるんだから……っど、今何時だっけ？」

「六時くらいじゃねえの」

彼女は学生の返答を聞くと携帯電話を取り出す。

「親に電話しないと。お父さんあたしのこと可愛くて仕方ないんだ……」

「……………」

「…………いやー、またあ？ 何でいつつもここ電波ないんだろ。ちよつと外行つてくるから」

朱礼は瓦礫の山をぴょんぴょんとび跳ねながら足早に教会の外へと出ていった。

残された学生は何もない天井を見上げる。

お父さん…………ねえ。全くもって胸糞わりい響きだ。いつそのこと記憶までぶっ飛んでくれねえかな。…………ま、それより。

視線を落とすと自分の携帯電話を取り出し、先程切った電源を再び入れてみる。画面上部の電波状況を表すアイコンは消え、圏外という表示に切り替わった。

やっぱり妨害電波飛ばしてんなあ。いや、たまたま飛ばしてる電波が携帯の妨害になっただけかあ？ ったく、考えれば考えるほど気色わりいことする奴らだ。

学生は例のソレを見つめる。

この世界はどうなってるんだよ。こんな何の変哲もないかつ…………つとなん…………だ…………？

突如学生を襲ってきた目眩。肩にのしかかる形の見えない重圧。足腰の震え。それに追い打ちをかけるような激しい頭痛。

「くっ……！ これ、も……奴らの……仕業か……？」

学生は膝から崩れ落ちると、ソレに手を掛け荒々しくなった呼吸を整えようとする。

「はっ、はっ、はっ……！」

くそっ……！ 声が全く出ねえ。くっ……。なん、だよ、く、そ……。

カタッ……。

後には、携帯電話の画面の眩い明かりだけが床に伸びていた。

第一章 黒き鬼は神の如く現る(1)

「……はっ！」

意識が戻ると、身体を地面に投げ出して倒れていた。

「……くっ……」

まだ少しくラクラクする頭を抱えつつ、足腰に残る違和感を抑えながら立ち上がる。

「何だ、ここ……？　　というか俺は」

辺りを見回すと、半壊状態となった教会であることがわかる。崩れた天井や無造作に積まれた石塊。ボロボロの長椅子に銅像。そのどれもが何者かに襲撃されたことを彷彿とさせるほど、荒れ果てた姿と化している。

この場所をこの少年は知らない。いや、正確には、覚えていない。

そして尚　　。

「俺は、誰だ？」

自分が誰なのか、どんな人間だったのか、覚えていない。

「記憶喪失……？」

自分自身で立ち上がったこと、自分で自分が記憶を失っているこ

とが判断できるということは、言語や知識など日常に支障をきたすものは失われていないだろうと推測する。

少年は身体を弄り、ポケットの中に携帯電話があるのを見つけると、慣れた手つきで開く。

もつとも、携帯の存在意義や使用方法　ダイヤルをプッシュすれば電話が掛けられることや、メールが打てること　はわかるが、どのフォルダにどんなものが収められているのか、登録されている名前を見てその人が誰なのか、ということはわからない。

つまり、自分の名前や思い出を含め、自分を全て失った状態。産まれたばかりの赤子にさえ劣る孤独。これから出会う人全てが、
初めましてこんにちは』。

少年は適当に電話を掛けてみようとするが、常に圏外状態なので諦める。思わず漏らす舌打ち。これからどうするよ？　そう思って視線を下げた時、地面に携帯電話が落ちているのを見つける。自分のものではない、他人のもの。恐る恐る手にしよく見てみると、多少の傷はあるものの長年ここに置かれていたものではないことがわかる。開いてみると、目に刺激が強すぎるほど発光する画面。充電が残っている証拠だ。ということは　。

他に人がいるのか……！

少年は小刻みに首を動かし他に人がいるのか確認するが、どうやら見当たらない。次に耳を澄ませてみると、教会の入り口の方から女性の声が聞こえてくる。

「……じよぶ、だーいじよぶつ。あたしがやつとくから……初めて

「ただど簡単でしょ？ ……うん。最初に仕留めるんだよね？ ……え？ いいの？ ……わかった」

「やっとくって何だ？ 何の話をしてるんだ？」

「…でも血とか内臓出てくるよね？ それがちよつとなあ…」

「おいおいおい。何だよ？ それじゃあまるで。」

少年は突如感じたことのない恐怖に襲われる。

「人気のない廃れた教会 他人に見られない為？」

「記憶を失っている自分 激しく争った為の記憶喪失？」

「落ちていた携帯電話 外で電話しているってことは他に仲間が？ 同じ被害者のもの？」

「女性の言葉 殺されるのか？」

「全身を通り抜けていく寒気。強張る身体。動けない。逃げ出さな
いといけないのに、脚が鉛のように重く動かない。」

「……うん。じゃあね」

「やばい！ 電話が終わった！」

「カタツカタツと革の素材がコンクリートに当たる音。死神が一步
一歩近づいてくる。」

迫りくる死の音が少年の心臓の鼓動を速くする。

この心音さえも聞こえてしまうのではないかと思うと、余計に動悸が激しくなる。

どこか、どこかに逃げる場所は……！

と、視線を突き出たスペースに向けると、ぽっかりと穴が空いているのではないか。この身体が通るかわからないけど、もうあそこから逃げるしかない。

しかし無情にも確実に音が近づいてきている。このまま走ってもすぐに見つかって捕まえられる可能性がある。

それならどうする……？

少年はポケットから自分の携帯電話を取り出す。

落ちていた携帯がこの女の仲間のだろうが、被害者のだろうが、持っていた方が良さそうだ。だからこっちはお別れだ。

取り出した自分の携帯電話を操作し、ミュージックのフォルダを開くと適当に再生させる。

すると歩いていた女性の足が止まる。

そして少年は音楽を再生させ画面を開いたままの状態の携帯電話を、投げる。

宙に弧を描くように飛ぶ携帯電話。薄暗い教会内故、それはまる

で流星が如く綺麗に舞う。

「なーに？ サプライズ？」

よしっ！ 今だ！

女性が携帯電話に気を取られ、入口の方へと戻っていく音を確認し、少年は一気に走りだす。

「今度は鬼ごっこ？ あんたそんなハチャっ子だっけ？」

くそっ！ もう気付かれた！

しかし少年は足を止めず、穴に向かって突進する。

気付いた女性もタッタッタとこちらに向かって走ってくる。

今にも破裂しそうな胸。思うように伸びない足。怖い。

間に合え！

第一章 黒き鬼は神の如く現る(2)

恐怖による緊張は疲れをも凌駕するのか。

少年は穴を抜け出した後、無我夢中に走り、気付くと繁華街に居た。

空はもう真つ暗だというのにこの辺りは昼間のように明るく、建ち並ぶ商店の間を人々が楽しげに歩いている。

紛れもない日常の光景を前に、少年はホッと胸を撫で下ろすと、道の脇に置いてあるベンチに腰を下ろす。

「ふう……」

ようやく息が落ち着いてきたところで、もう一度自分のことを考えてみるが。

全く思い出せない。今考えると、自分の携帯電話をもう少し細かく見ておけば、名前くらいは知ることができただろう。とは言え、やはりいくら頭を働かせようとも思い出せないものだ。よくドラマで、縁ゆかりの地に出向いたりするのを見るが、その地自体が思い出せないし、その地を知っている者も思い出せない。八方塞りとはまさにこの状況なのか。

頭を抱え俯いていると、不意に声を掛けられる。

「きみ、もしかして、くろくも君かね？」

「え？」

顔を上げると、体格の良いスーツ姿のおじさんがこちらに顔を覗かせてきた。

鼻の下に沢山の髭を蓄え、薄つすらと頭皮の見える髪の毛をふわふわと靡かせながら、「やっぱり」と呟いてから更に続ける。

「私は駿河学園高等部の教師でね、一年生の頃、君の担任だったんだよ？　と言っても少しの期間しか一緒じゃなかったからね、覚えていないかな？」

「すみません。全く覚えていません」

なるほど。駿河学園という所に通っていたのか。一年生の頃の担任と言っているけど、見覚えがないな。

「まあ仕方ないな。あれから二年が経っている訳だしね。きみが入学して数週間で辞めたと聞いて驚きだったよ。あの時は担任として失格だと嘆いたものだ」

「え、俺学校辞めたんですか？」

なんとということだ。最低限人間としてきちんとした人生を送ってきたものだと思いついていたが、高校を辞めたというのか。だとしたら現在は高校三年生。今まで何をやってきたんだ？

「くろくも君が自分から辞めたんだよ？　一体何があったんだい？」

「あの……俺の下の名前は何というんですか？」

「ん？ おかしなことを聞くね。だいき。大きな鬼と書いて大鬼。苗字は黒い雲で黒雲」

「黒雲大鬼……」

少年こと黒雲大鬼は立ち上がると、話し掛けてきたおじさんを無視して走り出す。

「あ、ちよつと……」

繁華街から裏路地に入り、人気を避けるように奥へと進む。

だいき。その響きに確かな感触を覚えている。きっとそれが自分の名前なのだろう。ということはすなわち、あの教師の話も真実ということだ。

コの字になった道を進むと更に人が無くなり、やがて電灯一つない開けた通りに出た。

高校を早々に退学し、何をしていたんだ？ 何で辞めたんだ？
自分は誰なんだ……？

「はあ……はあ……」

膝に手を付き息を整えると、右手に小さな公園があるのを発見する。見たところごく普通の公園のだが、中央ではドラム缶の中で火が燃えている。もしもここでバイクに跨るあんちゃんがいたとしたら、雰囲気抜群だろう。しかしこの公園には生憎暴走族どころか人間一人いない。じゃあなぜ燃えているんだ？

そう思った時、道の奥にあるトンネルから人影が動いているのが確認できた。

なんだ？ こんな時間にこんな場所に来る奴なんているのか？

嫌な予感が脳裏を過る。燃え盛るドラム缶に現れた人。明らかに常人ではない。少なくとも授業をサボる高校生等とは次元の違う世界の住人。

逃げるか……？

だがしかしそれは叶わない夢と化した。

トンネルの所にいた人影がこちらに気付き、声を荒げて走ってきた。

「だいきいいいいい！」

一瞬息を呑み、すぐに足を動かす。しかし何を思ったか、今来た道を引き返さずに公園へと逃げ込む。

な、なんつ、何なんだあいつ！ 何で名前を知ってるんだ？ 何で追ってくるんだ？

黒雲は公園内を素早く確認すると、用途のわからないドーム型の遊具の中に身を隠す。

「俺は一体何者なんだよ……」

静かに顔を出すと、坊主で強面な男が金属バッドを片手に公園へ入り込んできた。

「どーこ行ったんだ？ まあここからは逃げれないしな！ ゆっくり探してやるよ」

くそっ！ この公園入口は一つしかないのか、逃げれない……。

「この前のお返しはたっぷりさせてもらうからなあ！」

お返して何だよ……！ 何をしたって言うんだよ！ ……ん？ いや、待てよ？ これはチャンスかも知れない。あいつはどんな恨みを持って追ってきたのか知らないが、少なくとも黒雲大鬼という人物を知っている。うまく行けば素性を聞き出せる？

「……よしっ」

黒雲は大きく深呼吸をすると、遊具から姿を出す。

「自分から姿を現すって何だあ？ 命乞いでもするつもりか？」

「そっ、そんなつもりはない。少し話をしよう」

そう言つと金属バッドの男は肩眉を下げ、訝しげにこちらを見つめる。

「話ってお前、何急に丸くなってんだ？ 能力の使い過ぎで記憶でもぶっ飛んだかあ？」

「あなたの言う通り、俺は記憶を失っているんだ。俺が誰なのか、

記憶を失う前はどんな人間だったのか、完全に忘れてる。あなたの言う能力ってなんだ？」

「……っふ。はっはっはっは！」

嘲笑うかのように声を上げると、金属バットの先を黒雲に向ける。

「まじで忘れてんのか！ こりゃあ都合が良い。能力が使えないお前なんぞただのガキだなあ。はっ！ 悪いけど俺には記憶があるんだ。お前に甚振られたおぞましいほどの記憶がなあ！」

腕の袖を捲ると、火の灯りに照らされ痛々しい姿が顔を出す。それは切り離された肘から先を、強引に手術でくつつけたような傷跡。

「いつ見ても興奮するぜえ？ 俺の腕をこんなにした奴をぶっ殺せる時が来るって思うとな！ さあてどうしてやるうか？ 腕の一本や二本で済まされると思うなよ？」

「ちよっ、ちよっと待て！」

黒雲は腕を前に出し制止しようとするが、相手の男は聞く気がないようだ。

金属バッドが降りかざされる。

「ちっ！」

ブンツと降られる金属バッドを身を屈めて避けると、低い姿勢のまま男の横を走り抜ける。

「逃げんじゃねえよクソガキがぁ！」

はっ……！ こいつは無理だ。少しでも話し合えばわかると思っ
た自分が馬鹿だった。

公園を抜け、寂れたトンネルに入る。後ろに顔だけ向けると、鬼
の形相な男。

人に会えば会うほど疑問も比例して増えていく。そして相まって
沈んでいく心境。これからどうすればいいのだろうか。もしかして
自分の居場所などないのか。

恨みを持った者からは能力という謎の存在と絡まって追われている。
不透明だが、実際に追われている現状を鑑みればそれが事実で
あり真実。もしかしたら学校を辞めているのも、この状況と何らか
の関係があるのか。

五〇メートルほどあったトンネルを抜けると、スラムの雰囲気
溢れた街に出た。チカチカとする電灯、散らばったゴミ袋、崩れた
建物、物乞い、道路で寝てる人間。どこに視線を向けても、非衛生
的で最低限のコミュニティだけを残した風景が映る。

黒雲は辺りを見回すと、目についた一番細い道に入る。泥だらけ
の道を蛇のようにクネクネと進み、自分がどこを走っているのかわ
からないくらい適当に足を動かす。今は自分が迷ってしまうことを
気にしている暇はない。追手を撒くのが先だ。ある意味で黒雲には
迷いが無い。

だがしかし。

「はあ……はあ……。まずいな」

三方が高い塀で囲まれた。つまりは行き止まり。

もう一度後ろを確認すると、そこには真つ暗な路地だけがあった。

「何とか撒いたか……？」

金属バッド男の姿は無いのだが、これで安堵の気持ちいっぱい座り込む訳にもいかない。逃げ道は完全に塞がれているし、道自体の広さもあまりないのだ。もしも奴がここに行きついたら、次は無事に逃げれるという確信はどこにもない。

「さて、次はどうするべきか」

暗中模索という言葉があるが、今のままでは模索することにまで躊躇してしまいそうだ。半端な情報を得てしまい尚その情報が幾分酷いものである故か。本当の自分を知りたい反面、知ってしまったら自分が自分でなくなりそうで怖い。

そんな風に頭を悩ませていた時だ。突如ポケットの中でバイブレーションと共に携帯電話のコール音が鳴り響く。幸いそれほど大きな音ではなかったので、気付かれる心配はないだろう。

黒雲は少々戸惑いながらも携帯画面を開く。そこには『登録者2』という表示がされていた。

「被害者の関係者か？ それとも犯人側の……？」

自分が意識を取り戻した現場に落ちていた携帯電話。自分と同じ

被害者のものという可能性もあるし、犯人のものという可能性もある。もし前者であるなら、早急に電話に出て現状を伝えないといけないだろう。だがしかし後者なら……。

未だに鳴り続ける携帯電話。

「考えてる時間はないか。一か八かだ」

黒雲はボタンを押すと、そっと耳元へ持っていく。

『ちよおつとあんた！ 今どこよ！』

怒りに満ち溢れた女性の声。どこかで聞いたことある気がするが、今はやはり思い出せない。とりあえずは無言で相手の出方を探ってみる。

『何黙ってるの？ 私あんたのこと追い掛けてたから、まだ家に帰れないでいるんだけど』

追い掛けてた……？ まさか、あの教会にいた女か？ だとすると犯人っ！

『ちよつと聞いているの？ もう帰るよ？』

しかし、確かに怒りの混じった声色だが、それは殺意というよりは友達に対する分別された怒りのように感じる。

『だいきのばーかつ！ もう死んじゃえ！』

「…………え？」

な、なんだ？ どういうことだ？

目まぐるしい勢いで回転を始める思考。

だいき？ 大鬼は自分だ。犯人ならば名前を知っていてもおかしくない。だけど違う。この携帯電話は落ちていたものだ。決して黒雲大鬼のものではない。だって、自分の携帯電話はポケットに入っていたんだから。じゃあなんでこの女の子はこの携帯電話に電話を？ しかも持ち主を大鬼だと思っただけで掛けてきている。よく考えれば、登録がされていたってことはお互いが顔見知りだということだ。じゃあ犯人じゃなくて友達？ 実はあの女の子と友達で、たまたま教会に行っただけで、たまたま記憶を失ってしまったのか？ いや、だとしてもおかしい。この携帯電話は自分のものじゃないんだ。この携帯電話の持ち主は黒雲大鬼で、電話越しの女の子は黒雲大鬼と知り合いで、自分は黒雲大鬼で、けどこの携帯電話は自分のではない……。だとしたら。

「なあ、俺って、誰なんだ？」

『やっと喋ったと思ったなら何それ？ 人間の真理でも問おうっての？』

「いいから答えてくれ！ 俺は誰なんだ？」

『……なによ。あんたはだいき。黒雲大鬼よ。どうしたのあんた？』

「何を以て俺を大鬼だと判断してんだ？」

『何って、ほんとあんた頭大丈夫？』

「いいから答える！」

『……声でわかるわよ。それにあなたの携帯に電話してる訳だし』

黒雲大鬼。それは正しく自分のことなんだ。そしてこの携帯電話も自分のものということ。じゃあポケットに入ってたあれは、他人のものだったというのか？

「俺たちって友達なんだよな？」

『えっ……ま、まあ。あんたからそんな風に言われると思ってなかった……』

やっぱり友達なんだ。ということは、大方友達同士で教会に遊びに行ったというところだろう。そして事件染みたことなんて何も無かったんだ。単なる勘違い。しかし問題が晴れた訳じゃない。ポケットの中の携帯電話と、落ちていた携帯電話。この二つの携帯電話が謎だ。

黒雲は路地を見つめ、金属バッド男の気配が無いのを確認すると、壁に寄り掛かり腰を下ろす。

この女の子は友達。二人で遊びに出掛ける仲だから、きっと大鬼という存在をよく知っているに違いない。会ってみるしかない。

「いいか、落ち着いて聞いてくれ。俺は今記憶を失ってる。お前が誰なのかも、自分が誰なのかもわからないんだ」

『ちよっ、えっ？ 記憶喪失？ 何言ってるの？』

案の定、女の子は戸惑うように語気を荒くする。

「ほんとなんだ。だから助けて欲しい。今から会えないか？」

『会って……私もうそろそろ帰らないと……』

「頼む……頼れる人間がお前しかいないんだ」

別に変な意味ではない。事実だ。

女の子は暫く考え込むように「うーん」と漏らすと、

『わかったわよ。ちゃんと借りは返しなさいよね？　っで、今どこにいるの？』

「スラム街のようなところ」

『はあ？　あんた何でそんなところ行ってんのよ？　あんたみたいな人が行くとこじゃないわよ！』

「だから記憶を失ってんだって！　どこが危ないとか、んなことわからないんだよ！　場所わかるんだろ？　早く来てくれ」

女の子は重たそうにため息を吐く。

『まったく……じゃあ近くに着いたらまた電話するから』

「ああ。ありがとう、頼む」

通話を切る。暗闇に光る携帯画面には、初期設定のままであろう
陳腐な背景が映っている。

「とりあえず、ここから移動した方がよさそうだな」

黒雲は立ち上がり、路地の先に視線を向ける。

「やっと見つけたぜえ！　だいきいいいいいいいい！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8229s/>

トレードオフ-reverse-

2011年10月7日05時34分発行